

2019 年度 第3回講演会 記録

日 時	2019 年 5 月 11 日 13:00～16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	池田木材株式会社 代表取締役社長 池田聡寿先生
演 題	木曽ヒノキの自然と文化
備 考	参加者 201 名（会員 200 名、聴講生 1 名）、 記録 岩佐 達

はじめに

【田中克先生】

平成 28 年 10 月 8 日、映画ディレクター鎌田雄介さんがこの会場でご講演と共に上映された、日本の自然と精神文化を紹介した映画「うみ やま あひだ」に本日の講師池田聡寿さんが、伊勢神宮式年遷宮に献納する御神木を木曽のヒノキの森から切り出す儀式を統括する役割で、出演されました。直接お目にかかったのは、その後の試写会のときが最初でした。池田さんはヒノキの林業家ですがスキーもお好きなので、そのようなつながりも後押しとなって、本日講演をしていただくことになりました。

大都会東京のど真ん中にある明治神宮の森は、ナショナルプロジェクトとして 100 年前に全国延べ 11 万人の青年達の勤労奉仕と、約 10 万本の全国からの献木によって造られた人工林です。百年近くを経過した今では、うっそうとした立派な森になりました。ここで 4 月 21 日に「アースデイいのちの森」のイベントがあり、司会を野中ともよさんが務められ、トークショーに池田さん、環境省の中井徳太郎さんが出演されました。いずれもこの講座で今年度講演していただく方々であり、つながりの世界を作り直す森里連環学がこのような形で深まりつつあると言えます。本日は木曽ヒノキを育て日本文化に貢献されている池田さんのお話を楽しみにしています。

【池田聡寿先生】

伊勢神宮とのつながりの中で私がしてきたことを皆さんにお伝えしたいと思います。私は大学卒業後、父の事業を継いで池田木材（株）に入社しました。木曽木材協同組合という組織があり、全国の神社仏閣に用材を納める仕事をしております。公共施設としては岩国・錦帯橋とか、愛媛県大洲市にある大洲城の屋根・柱・床材に木曽ヒノキを納めました。



伊勢神宮の式年遷宮では、建て替えられた社殿内を飾り立てる奉飾品や服飾の「御装束」、武具や楽器などの調度の品々である「神宝」も一新されるので、この用材を納めています。京都の神社仏閣では、知恩院御影堂修復にあたり屋根材を、清水寺の阿弥陀堂奥の院修復の用材を納めました。

奉仕の関係では 6 年前に大爆発を起こした御嶽山の登山道整備を 15 年継続して実施しています。1 千年続ける意気込みで取り組んでいます。木曽は一昨年日本遺産に登録されました。次は世界文化遺産にすることを私のライフワークにして取り組みたいと思っています。

田中先生から紹介のあった映画「うみ やま あひだ」は、環境問題を提起するのに適した映画と思うので、中学生、高校生にぜひ見てほしいと働きかけています。

また、文化遺産を未来に繋ぐための森づくりの有識者会議（略称森づくり会議）を 2002 年 5 月に立ち上げました。日本の木造文化財を守るためには、どのような方法を生み出せばよいのか、寺社関係者をはじめとする今日木造文化財を守っている人々、木造建築の匠、森林所有者、森林行政にかかわる人々、日本の木

造文化財と森林を守ろうとする人々とともに、私たちはさまざまな立場の人々の知恵を結集し、関係する人々、諸団体に働きかけながら、森に大径木を残し、木造文化財を守りたいと考えています。

「日本伝統技術保存協会」という組織があります。大工さんが一人で後継者を育てるのは資金的にも難しいので、皆が資金を出し合い、超一流の講師による技術講習会を行うなど、日本古来の伝統的木造建築技術の保存・継承と向上を図り、後継者の育成や文化財建造物の保存に努め、日本文化の向上を目指して活動しており、国から4、5千万円の交付金をいただいています。「全国文化財所有者連盟」は文化財所有者がその保存の仕方を勉強するあつまりです。

長野県伊那市において「ケズロー会」というカンナの技能を競う大会が明日開催されます。大変面白いので、よければぜひお出でください。この催しの始まりは、ある法隆寺宮大工のもとに弟子入りしたひとが1週間、さらに2週間過ぎてもなにも教えてくれないので、なぜかと問うたとき棟梁がカンナを一枚引いて渡してくれた。どういうことかと考えたが、「道具を大切に扱わないものには何も教えることはない」という意味だと悟り、以後毎日カンナを砥ぎ、大切にするようになったという故事に因むもので、多くの人がその薄さを競い、会場はヒノキの香りでいっぱいのイベントです。自己紹介が長くなりましたが、本題に入ります。

第一部：泣いて寝た御神木ー森で生きている命のつながり

1. 我が社の宝物

工場の敷地内にいくつかのヒノキの根株などを我が社の宝物として保管している。

- (1) 現在はないが、昔はこのような巨木があった証として木曾ヒノキ根株（推定樹齢数千年）の保管
- (2) 村人が怖れ敬っていたヒノキが姫路城築城のために伐られ、神社に奉納されたものを預かり、保管している。（推定樹齢 800 年）
- (3) 伊勢神宮遷宮に際し、御杣始祭りの練習用として伐採したヒノキの根株
- (4) 皇居新宮殿建設に際し、正殿松の間の長押材として曳いた木の一部。

2. 遷宮～御杣始祭り ～泣いて寝る御神木～

立松和平は著書「日本の歴史を作った森」に、次のように記している。

『日本には世界に誇る木の文化が二つある。その一つは法隆寺で、1200 年前から修復を繰り返しながら、今も折りの場として現存していること。もう一つは伊勢神宮で、1600 年以上前から 20 年ごとに遷宮を繰り返してきている。20 年ごとに新しくなるので世界文化遺産にはなれないが、もし、「無形文化遺産」というものがあれば、間違いなくこの伊勢神宮は該当すると思う。日本には常若思想といって、日々あらたに生まれ変わる思想があるが、伊勢神宮は 20 年ごとに、創建当時の 1600 年前と同じ、みずみずしい姿で生まれ変わる、すばらしい木の文化である。』



遷宮にあたり行われる祭祀は、伊勢神宮で行われる山口祭（式年遷宮に際して最初に行われる）、切り出す前にその木の神を祀る木元祭（正殿の忌柱を切るときの祭り）、左手と右手の木が折り重なるように寝かす御杣始祭（木を切るとは言わず寝かすという）がある。（右上写真）

御杣始祭でのヒノキの伐採は、古式にのっとり斧だけで腰のあたりをくり抜くように切っていく。“ツル”という木を支える箇所を3カ所残してくり抜く。最後にこの“ツル”を切り離すと“キィー”と泣くような音を出して寝る。この瞬間、あたかも血が通うかのように当たり一面にヒノキの芳香がただよう。

(このシーンを動画で紹介された)

(1) 株祭り

伊勢神宮が大事にしているのが命のつながりで、これを形に表わしたのが「株祭り」である。寝たばかりのヒノキの先端を若い杣が走って取ってきて杣の頭領に渡す。これは技術を継承させてもらいますとの思いを込めている。頭領は切ったばかりの根株に斧を突き刺し、それを抜くと同時にヒノキの梢を挿す。これはこの梢と根株の間の幹を無駄なく大切に使いわせてもらいますとの誓いと、根株の上に梢から種が落ち、それが発芽しやがて大樹になるようにと願うお祭りである。

(2) 奥千本の美しい森と 300 年前へタイムワープする 100 林班

木曾で最も美しい奥千本といわれる森の大樹の下層部に緑鮮やかにシロモジが繁茂している。木曾の森の歴史を振り返ると、安土桃山時代から江戸時代にかけて、木曾は米があまり取れないため農民が森から木材を伐り出し年貢として納めた。これを木年貢という。また各地の城や寺の修復・改築用材として木曾の森が乱伐され、その結果、山が丸裸になった時代がある。その時代から約 300 年経過した。現在 100 林班（注）では、今までの森から見ると植林密度を 40～60%程度のまばらにしている。これは実験的に冬の雪が積もった時に下の幼樹を痛めないように母樹を間引き、光りが地上部まで届くようにしたものであり、幼樹が緑の絨毯のように繁っている。植林の専門家には密植を勧めるひともいるが、木曾の森の歴史からみて、母樹を大切にしておけば森は再生するというのが私の考えであり、木曾観察会では最初にこの森をみていただく予定である。

（記録者注）林班：林業で、森林区画の単位。屋根筋・河川など自然地形を用いて境界を設定し、施業の便を図る。

(3) 木曾檜の成長～根上がり木～森の循環

「株祭り」は伐採した根株の上に種が飛んできて新しい生命が宿り、やがて大樹になるのを祈る儀式である。私が木曾に戻って以来 35 年ほど定点観察をしている根株がある。苔むしてボロボロになった根株に種子が落ち、1 年目は杉玉のような形で芽が出て細い葉だけを伸ばす。それが 30 年～35 年経過すると太いもので直径 15～20 cm ほどに成長する。

木曾の地層は特殊なポドゾル（注）という地層でできており、固い岩盤の上に薄い表土が覆っている。ヒノキの根は下には伸びず横に、樹高 30m の木なら直径 30m の範囲に根を張ると言われる。伐採後に根株となっても水を吸い続け幼樹を育てる。幼樹は成長に従って根株の側を伝って細い根を張り地中から養分、水分を吸収できるようになった時、根株はその役割を終え土に帰る。

江戸期、尾張藩による林政改革が行われ、木曾の森は今も伐採を禁じた状態が続く。その結果美しい森を取り戻した。一方では、自然保護のため木を伐ってはいけないことになり、その結果、陰樹のヒバ（アスナロ）が増え、ヒバの森に代わってしまうのではないかと危惧している。

天然更新で森を復活させようという新たな取り組みが学識者を交えて始まっている。その中で、ヒノキだけでなく、木曾五木のコウヤマキ、サワラなどのほかヒバ、ツガ、トウヒや広葉樹が混在している状況に手を加えないほうがよいと主張する学者に対し、私たちは、木曾の山は昔から人の手を加えることで維持してきた山であり、計画的に伐るべきと考え、激論を交わしているところである。

前半講演の最後に木遣り唄（森の中でおこっている命の繋がりを唄で表現したもの）を披露していただき全員で掛け声をかけ唱和した。

（記録者注）ポドゾル：灰色の土の意。冷帯の針葉樹林下に発達する土壌。表層は酸性腐植の浸潤により塩基・鉄・アルミニウムを失って灰白色の漂白層となり、下層はこれらの物質が沈殿して褐色の緻密な集積層となる。

(休 憩)

第二部：木曽山の歴史

(1) 鎌倉、安土桃山時代

木曽の山は、鎌倉時代以前は樹齢 1000 年を超えるヒノキを多数含む混交林であったと推定されるが、応仁の乱以降安土桃山時代を通じて驚くほど多くの戦があり、森の破壊が続いた。信長の比叡山焼き討ちだけでも 120 以上のお堂の再建が必要になった。全国の城の築城や、寺院の復活にはとてつもない量のヒノキが必要となった。また、江戸時代、米のとれない木曽地方では米の代わりにヒノキをはじめその他の樹種が年貢として納められ、枯渇が進んだ。

木曽では川の氾濫が何度も繰り返されたため、尾張藩が山に入り調査をしたところ「木曽は全山尽き山となりけり」の状態、9 割方伐採され、はげ山が広がっていたと推定される。

1665 年、林政改革に取り組み、一切人の立ち入りを禁止する「留山」、鷹の営巣地があり伐採禁止の「巢山」、村人が自由に出入りし木を伐ってもよい「明山」の「三山制度」を開始した。しかし、それでも枯渇は止まらず、1708 年「停止木の制度」を制定し、明山でも木曽 5 木（ヒノキ、サワラ、アスナロ、コウヤマキ、ネズコ）の伐採を禁止した。

昔より山の掟として「7 寸（20 cm）以下の木は伐ってはいけない」の決まりがあったため、母樹が残り、種が飛び今の森が復活した。

吉野の山は大半が民間の所有だが、木曽は特殊である。木曽山は 15 万 5 千 ha あり、ほぼ香川県と同じ面積だが、その 93% の 14 万 5 千 ha が森林、またその 60% の 8 万 9 千 ha が国有林である。明治に入り国有林化され内務省、次いで宮内省帝室林野管理局が皇室財産として御料林、後に神宮保林として守られてきた。

昭和に入りチェーンソーが導入され、流れが変わった。昔からの森の掟が皆伐方式に変わり、さらに昭和 34 年の伊勢湾台風、36 年の第二室戸台風の被害により尽き山に近い状態になった。

(2) 三浦実験林

昔の林野庁営林局、今は森林管理局が各地でいろんな取り組みを行っている。北海道ではナラの森の再生に取り組んでいるが、うまくいっていない。最大のネックは笹であり、クマザサの繁茂するところでは森は育たない。

木曽では中部森林管理局木曽管理所が三浦実験林を作った。伊勢、第二室戸の二つの台風の後、風倒木の処理のため伐採せざるを得ず、尽き山の状態になっていた。中部森林管理局のえらいところはやたらと伐らず、信州大、京大、森林総合研究所などの協力を得て、いろんな天然更新の実験を始めた事である。

最初に行ったのは 50m くらいの間隔を空けて帯状に皆伐し、そこで笹を枯らす薬を撒く所、5 年、7 年ごとに笹を刈る所などさまざまな組み合わせの実験を行った。そのデータによると、幼樹の豊作年は 4 年に 1 回、種のできない凶作年は 2~3 年毎、種の散布は樹高の 1~2 倍の範囲と報告されているが、我々の現場での感覚では、樹高の 10 倍程度はある気がする。帯状の皆伐は風の通り道をつくり母樹をいためるので最近はおセロ状の皆伐も行われている。50% 程度の母樹を残して伐採し天然更新を図るのが最も良かった。

(3) 悠久の森

今、悠久の森という名の森づくりが木曽で始まっている。

木曽全体の 1/5 に当たる 1 万 6 千 ha という広大な地域を三つの地域に分けて実験している。天然木が多く残っており、一切の伐採を禁止する保護区域（コアゾーン）、その周辺の人工林や伐採跡地も含めた復元区域（バッファゾーン）、もう少し広い意味で生産をしながら時には皆伐し、植え替えてゆく調整区域に分けられている。

この取り組みの結果が判るのは 300 年後という壮大な実験であるが、次の時代に継承できる森づくりが始まっている。

最後に、シニア自然大学校の発展を祈り、木遣り唄をうたい締めたいと思います。

（木遣り唄—シニア自然大学校 Ver. 一 を全員で唱和） ご清聴ありがとうございました。

【Q&A】

Q1: 昨今、北海道の土地を中国人が購入することが報道されているが、木曽はどうですか？

A1: 幸い、木曽ではまだその様な事は起こっていないが、木曽は愛知水道も含め、三河地方へ水を供給しているので、行政は水源管理上からも重視する必要がある。明山の部分ではソーラーパネルを勝手に設置した人がおり、景観保全に関する法規制を含めた取り組みが必要になってきていると感じています。

Q2: 御杣始祭りで安全対策はどのようになっていますか？

A2: 伐採するヒノキの重量は 10 トンほどもあり、危険を伴う作業なので、万一にも見物人の方向に倒れることがないように十分見極めたうえで作業を始めています。風の方向はじめ、状況を適切に判断し、安全に仕事できる人を 5～6 名選んでいます。

【田中先生コメント】

御杣始祭りで神木となったヒノキの根株が、その孫の幼樹のために孫樹が何十年もかかってしっかり根を張るまで頑張り、命を繋いでいく姿は、地球環境自然学講座のこの 5 年のテーマである森、里、海の繋がり、命の循環そのものであり、我々シニアが考えるべき本当に大事な問題を提起していただきました。千年という言葉が度々出てきましたが、千年の巨木は、科学やそれを基にした技術がいくら進んでも一瞬には生み出すことのできない存在なのです。千年かけて生まれる価値の重みをもう一度見直す時代に生きているのではないかと思います。今までは開発優先、経済優先の時代であったが、令和は、巨木に代表されるような自然を大事にする時代であって欲しいと願わずにはおられません。

本日は令和の最初にふさわしいよいお話をしていただき、ありがとうございました。木曽ヒノキの観察会が、ますます楽しみになりました。

以上

